大森笹洞5・6号古窯跡発掘調査報告書

― 中央新幹線建設に伴う非常口及び換気施設、管理用道路の設置に伴う発掘調査報告書 ―

2018

岐阜県 可児市教育委員会

例　　言

1．本書は、岐阜県可児市大森1690番１における大森笹洞５号古窯跡（21214-4846）、大森笹洞６号古窯跡（21214－4847）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は可児市教育委員会が開発者である東海旅客鉄道株式会社から委託を受け、平成29年６月27日から９月28日にかけて実施した。

3．調査組織は下記のとおりである。

調査組織

教育長	篭橋　義朗
教育委員会事務局長	長瀬　治義
文化財課長	川合　　俊
文化財係長	松田　　篤
歴史資産整備係長	千田　泰弘
主査	長沼　　毅
主査	牛田　千穂
主任	長江　真和（調査担当）
主事	織田　真琴

4．調査参加者は下記のとおりである。

黒田祐規子　多和田伴子　恒松勝己　寺田國春　西田まゆみ　堀木彰　本田博志
武藤淳司　山本智子

5．本書の執筆・編集は長江が行った。遺物実測は長江・黒田・本田が行い、トレースは長江・牛田・黒田が行った。遺構と遺物の写真撮影は長江が行った。

6．現地調査及び整理作業の過程で、下記の各氏及び各機関に多大なるご指導とご協力を賜った。深く感謝する。

（敬称・肩書略、五十音順）

伊藤真央　小澤一弘　澤井計宏　永井宏幸　中野晴久　平井義敏　藤澤良祐　森まどか
大森財産区

7．本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会（可児郷土歴史館及び収蔵庫）で保管している。

第１章　地理的・歴史的環境

地理的環境

可児市は、岐阜県中南部、木曽川中流左岸に位置し、東は土岐市、北東は御嵩町、西は坂祝町、南は多治見市と愛知県犬山市、北は木曽川を隔てて美濃加茂市、八百津町と接している。平成17年５月に可児郡兼山町と飛び地合併した。

地質的には、美濃加茂盆地の南部にあたり、木曽川と可児川およびその支流の久々利川に沿う低地には、洪積層と沖積層が広がっている。可児市南部に広がる丘陵は、東濃地方を中心に分布する瑞浪層群から成り立ち、蜂屋層、中村層、平牧層の３層に区分されている。主に凝灰質砂岩から成る平牧層は、多くの動植物化石を産出する他、露頭する部分で横穴墓が多数造られ、石材を使用した石棺の制作も盛んであった。

可児市南部から多治見市に続く丘陵地上部には、瀬戸層群上位の土岐砂礫層が広く分布し、大森笹洞５・６号古窯跡を含む大森笹洞古窯跡群もこの土岐砂礫層に位置している。

歴史的環境

大森笹洞５号古窯跡（１）、大森笹洞６号古窯跡（２）を含む大森笹洞古窯跡群（１～８）は笹洞溜池周辺に見られ、踏査や表採遺物から奈良時代の須恵器窯が１基、平安時代の灰釉陶器窯が３基、平安時代末期～鎌倉時代の山茶碗窯が４基と、計８基の古窯跡が確認されている。

北側の低丘陵（現星見台）及び大森川沿いの低地にある大森新田古墳群（９～20）は、６世紀後半から７世紀初頭にかけて築造された古墳群であり、いずれも円墳である。石室にはチャートの岩盤から採取した石材が使用され、大きな石材の間や閉塞石、礫床などには土岐砂礫層中の円礫が使用されている。初期に造られた大森新田５号墳（17）は竪穴系横口式石室が採用され、墳丘全体を覆う葺石が見られる。その他の古墳では横穴式石室が採用され、葺石は見られない。大森新田古墳群は石室構造や墳丘規模に明確な優劣は見られず、墳丘規模の差や葺石の有無は、築造の時期差によるものと推測される。その他の古墳では周囲に未調査の米穴古墳（22）や大森姫塚古墳（37）が見られる。

可児市の南西部に灰釉陶器窯・初期山茶碗窯、南東部に山茶碗窯が分布し、大森奥山古窯跡群（23～34）はこの分布の中心に位置する。昭和60年の宅地造成に伴い調査を行った大森奥山古窯跡群は、土岐砂礫層を掘り抜いて造られ、鎌倉時代の山茶碗窯が10基確認されている。遺物は碗や皿を主体とした製品が出土している。窯跡周辺では炭焼窯と思われる遺構が検出され、窯跡との関連性が推定される。平成28年には団地開発に伴い、大森奥山11号古窯跡（33）の調査を行った。これら以外の窯跡として平林１号古窯跡（39）、平林２号古窯跡（40）があるが、いずれも未調査である。

市内では南西部に平安時代後期の谷迫間２号窯跡・下切兎田古窯跡やこれに先立つ灰釉陶器窯が見られ、それより東側に前述した鎌倉時代の大森奥山古窯跡群が見られる。また、南東部に鎌倉時代末期から室町時代前期の久々利奥磯山古窯跡群が見られ、窯跡の分布状況から燃料の枯渇による窯跡と陶工の漸次的な移動が推定される。

古墳や窯跡以外では中世の山城である吹ケ洞砦跡（21）が見られる。横堀や土塁の横矢掛けなどの戦国時代後半の城郭に見られる複雑な城郭構造を持つ城跡であり、大森城主 奥村氏の城跡と伝えられる。この砦は奥村氏が築いた大森城の出城なのか、大森城を攻める際に築かれたのかは不明である。その他、集落跡とみられる遺跡は大森地区周辺では現在のところ確認されていない。

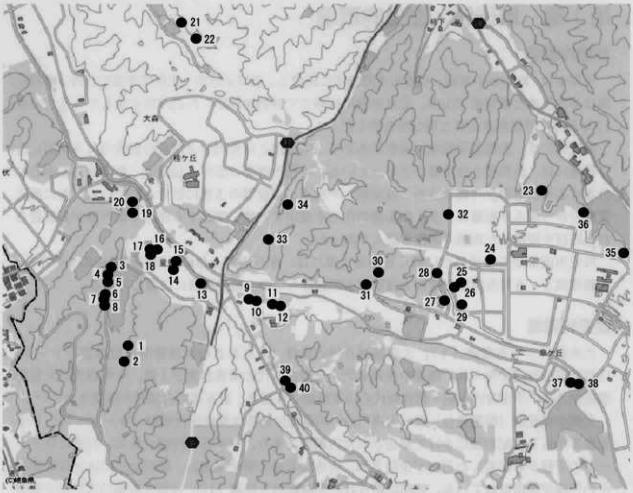


図1　周辺遺跡分布図（S=1/20,000〔（（C）岐阜県）の一部改変〕

1	大森笹洞5号古窯跡	15	大森新田7号墳	29	大森奥山7号古窯跡
2	大森笹洞6号古窯跡	16	大森新田8号墳	30	大森奥山8号古窯跡
3	大森笹洞2号古窯跡	17	大森新田9号墳	31	大森奥山9号古窯跡
4	大森笹洞3号古窯跡	18	大森新田10号墳	32	大森奥山10号古窯跡
5	大森笹洞1号古窯跡	19	大森新田11号墳	33	大森奥山11号古窯跡
6	大森笹洞4号古窯跡	20	大森新田12号墳	34	大森奥山12号古窯跡
7	大森笹洞8号古窯跡	21	吹ケ洞砦跡	35	柿下1号古窯跡
8	大森笹洞7号古窯跡	22	米穴古墳	36	柿下2号古窯跡
9	大森新田1号墳	23	大森奥山1号古窯跡	37	大森姫塚古墳
10	大森新田2号墳	24	大森奥山2号古窯跡	38	姫塚東古窯跡
11	大森新田3号墳	25	大森奥山3号古窯跡	39	平林1号古窯跡
12	大森新田4号墳	26	大森奥山4号古窯跡	40	平林2号古窯跡
13	大森新田5号墳	27	大森奥山5号古窯跡		
14	大森新田6号墳	28	大森奥山6号古窯跡		

表1　周辺遺跡一覧表

第２章　調査に至る経緯と経過

経緯

可児市大森地内において東海旅客鉄道株式会社より中央新幹線事業に伴う非常口及び換気施設、管理用道路の設置の工事が計画された。当該地には周知の埋蔵文化財である大森笹洞５号古窯跡、大森笹洞６号古窯跡が所在しているため、工事計画範囲が明らかとなった後、２基の窯跡の必要な調査範囲について協議を行った。古窯跡の取り扱いについて事業者と協議した結果、現状保存が難しいため、大森笹洞５号古窯跡は工事区域内にかかる部分で、窯体を含む約640㎡を行うこととした。大森笹洞６号古窯跡は、窯体が工事区域外であり、物原部分の約60㎡の本発掘調査が必要であると決定し、工事前に記録保存のための調査を行うこととなった。

平成29年６月15日に東海旅客鉄道株式会社と協定を締結し、平成29年度に発掘調査、平成30年度に整理作業の委託契約を締結し、可児市が実施した。

事務手続き

事業者発	平成29年６月５日		埋蔵文化財発掘の届出について
県教委発	平成29年６月23日	文伝第73号の198	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
市教委発	平成29年６月27日	教文第29号	埋蔵文化財発掘調査の報告
市教委発	平成29年10月４日	教文第53号	発掘調査終了報告書

経過

調査は、平成29年６月27日から９月28日まで行った。

大森笹洞５号古窯跡は、現地観察にて窯体らしき凹みと掘り抜き排土が確認できていた。被熱ラインと分炎柱を検出するために現地表面を下げていき、被熱ラインと分炎柱が検出されてから、それらを基に窯の軸を設定した。遺物から当該期の窯体は傾斜が急であるため、遺構の保全と安全を鑑み、窯体を２分割して調査を行うこととし、煙道部付近から焚口に向けて掘削を行った。物原部分は４分割し、作業場遺構の有無や灰層及び掘り抜き排土の範囲確認を行った。

大森笹洞６号古窯跡は、盗掘を受けた痕跡があり、工事区画内の灰層の広がりを確認するために東西及び南北にトレンチを設定した。設定したトレンチで確認された灰層の広がりをもとに調査を行った。

両窯跡の調査前の地形測量は平成29年６月20日～７月21日、調査後の地形測量は８月30日～９月28日に株式会社イビソクに委託をして行った。

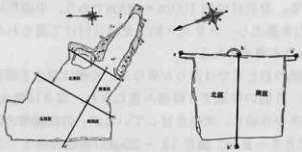


図２　5号窯、6号窯の調査区画

第３章　笹洞5号古窯跡

第１節　窯体構造

大森笹洞５号窯跡は、分炎柱を有する山茶碗を焼いた窯跡であり、分炎柱後方に間仕切り障壁をもつという珍しい構造である。窯体は標高 145 ～ 149m の西向き斜面に立地し、土岐砂礫層を掘り抜いて築窯されている。焼成室は約 5.2m、燃焼室は約 2.7m、煙道部は約 1.0m となり、全長 8.9m を測る。窯内には約 70㎝の天井や壁片を多く含む天井崩落層（８・９層）が見られた。

煙道部

煙道部は約 1.0m を測り、焼成室側から 35㎝程度くぼむようにゆるやかに伸びる。そこから約 50㎝直線的に立ち上がって壁のようになり、そこからまた緩やかな斜面となる。補修用などの貼り付け粘土は見られない。

焼成室

焼成室は約 5.2m、幅は焼成室下半で最大幅となり約 2.3m を測り、床面の角度は 30°～ 45°である。同時期の窯と比べ、やや小型で床面の傾斜は近い数字となる。窯内に残った碗用の焼台は、窯の中央から焼成室上部で原位置を保っているもので 28 個、ずれているものは３個、焼成室下部で 39 個が原位置を保っている。焼台の列は直線的であるが、焼成室中央付近から焼成室下部にかけて、窯の左側の列が左下がりとなる。焼台の痕は黒色となって残っており重なっている部分もあることから並び替えられた可能性も考えられる。また、小碗用の焼台は左側に 37 個、右側に１個が見られ、焼台上に小碗が残っているものは９個見られる。高さ４㎝程度の粘土塊を直接貼りつけるようなものが多く、小碗用の焼台の重さは約 200 ｇである。窯の左側部分に多く見られ、右側部分は焼台が外されているか、滅失した可能性も考えられるが、現時点で１つの痕跡しか確認できていない。間仕切り障壁の造りや分炎柱と左右の壁との距離がやや右側の方が広いことからも窯の右側を製品の出し入れ口とし、もともと右側には小碗用の焼台はなかった可能性も考えられる。

壁の貼り付け粘土は落ちており、地山が露出した状態で見られる。床面に最大で約 10㎝スサ入り粘土を貼っている。壁に近くなるほど貼り付け粘土は薄くなる。

断ち割り調査の結果、床面は１枚のみであり、床の貼替えは行っていない。

燃焼室・焚口

燃焼室は約 2.7m を測る。分炎柱は約 100㎝× 90㎝であり、平面形は楕円形を呈し、残存高は約 30㎝である。地山を基とし、スサ入り粘土を貼り付けて造られる。壁の様子から本来は 80㎝程度の高さがあったと考えられる。

間仕切り障壁は、分炎柱の右と左では造りが異なる。左側は粘土を帯状に貼って造られ、長さ約 85㎝、厚さ約 10㎝、５回の作業で３段積み重ねられ、高さは最大で 25㎝となる。直線的ではなく、燃焼室側にやや外傾し、灰色を呈しているが、自然釉等の付着は見られない。右側は長さ 22 ～ 30㎝、厚さ５～８㎝、高さ 12 ～ 20㎝の板状の粘土ブロックを５枚重ねて造られている。左側に比べ、約 20㎝焼成室側に設けられ各粘土ブロックの傾きも異なる。左側

と同様に灰色を呈し、自然釉等の付着は見られない。燃焼室部分では左右の壁が黒く焼けている。

第２節　物原と周辺の遺構

掘り抜き排土は褐色と黄褐色のしまった土で構成され、東西に約 7.4m、南北は調査区外まで続き 7.0m 以上を測る。

窯の左側には約 2.4m ×約 1.8m を測る斜面を切って造成された平坦面がある。溝やピット等の遺構は見られないことから、製品の選別のための作業場と想定される。調査区外の窯右側には、目視のかぎり平坦面らしきものは見られない。

灰層の堆積は最大で約 80㎝であり、西側は保安林の管理道が造られたこともあり、堆積土が非常に硬くしまっている。

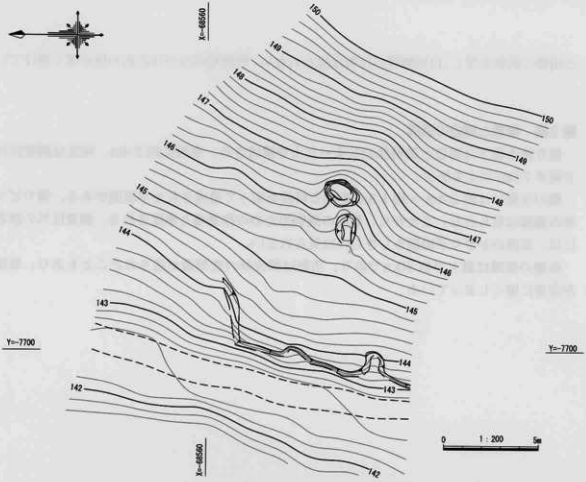


図３　大森笹洞5号古窯跡調査前地形測量図

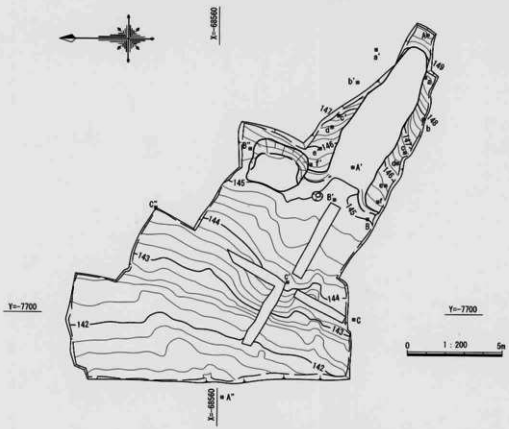


図４　大森笹洞5号古窯跡調査後地形測量図

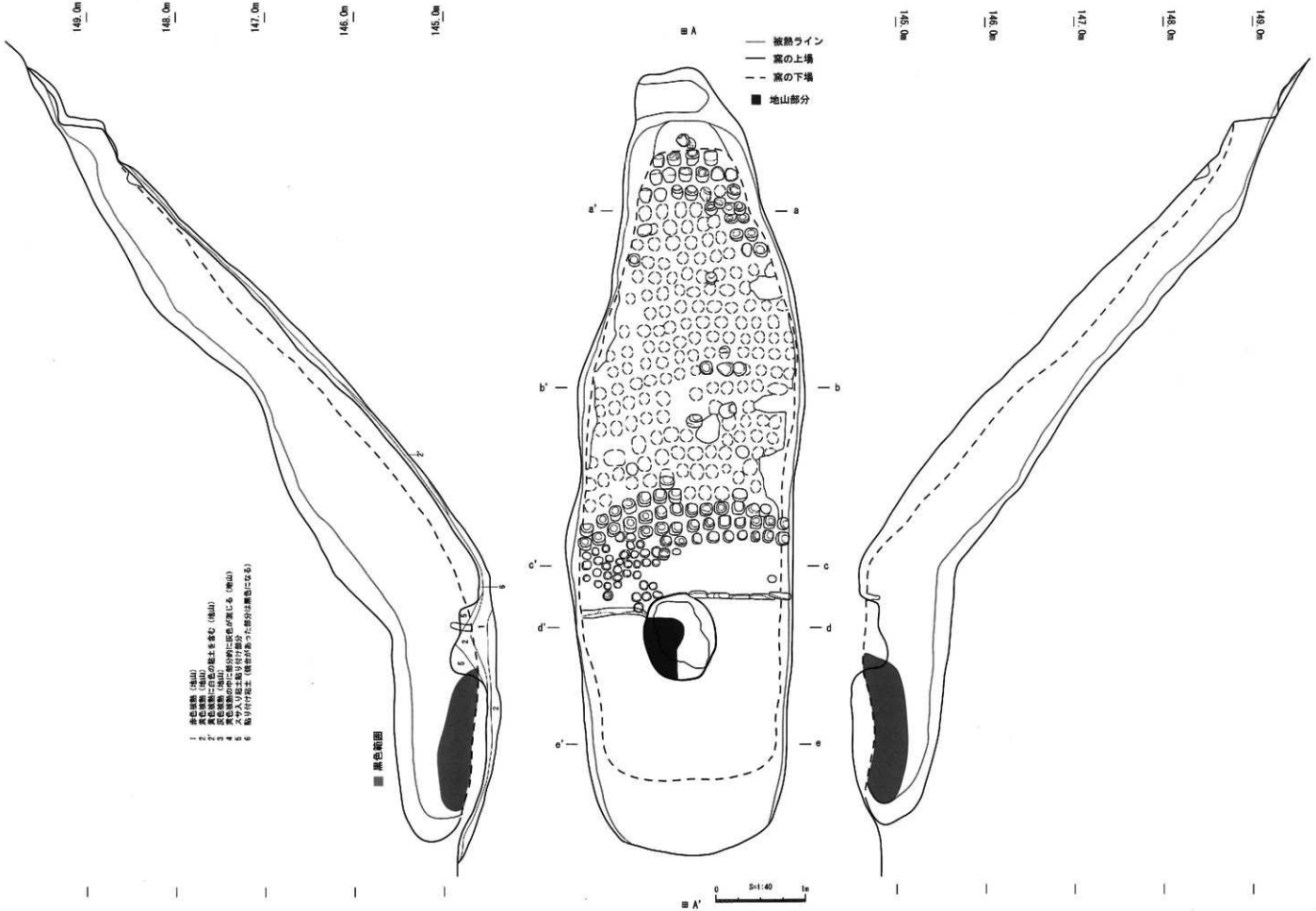


図５　窯体平面図及び立面図

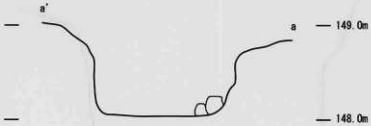
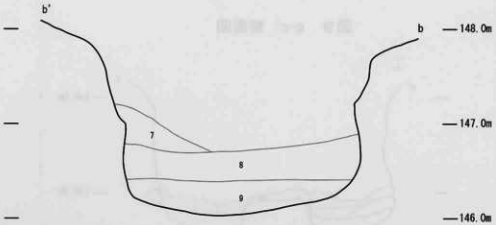
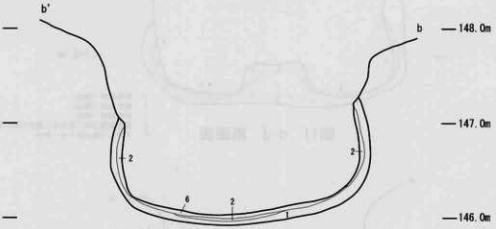


図６　a-a' 断面図



7　黄褐色　砂質土　しまりあり　粘性あり　Φ5～15mmの礫を少量含む（遺物含まない堆積土）
8　赤褐色　砂質土　しまりあり　粘性あり　Φ5～60mmの礫を少量含む（遺物や焼台を含む天井崩落層）
9　黄灰色　砂質土　しまりあり　粘性あり　Φ5～60mmの礫を少量含む（天井崩落層。部分的に赤味が強い）

図７　b-b' 土層図



1　赤色被熱（地山）
2　黄色被熱（地山）
6　貼り付け粘土（焼台があった部分は黒色になる）

図８　b-b' 断面図

0　S=1:40　1m

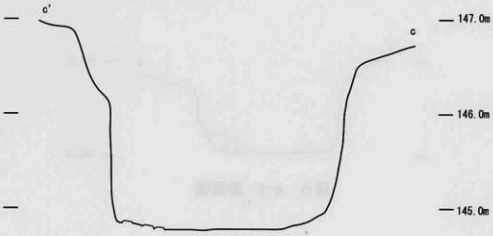


図９　c-c' 断面図

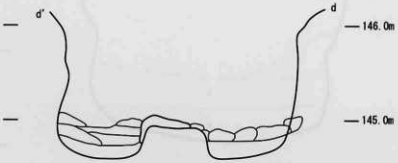


図10　d-d' 断面より間仕切り障壁見通図

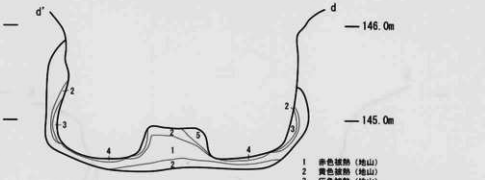


図11　d-d' 断面図

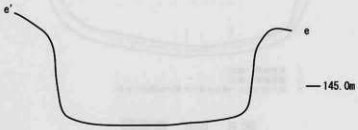


図12　e-e' 断面図

0　S=1:40　1m

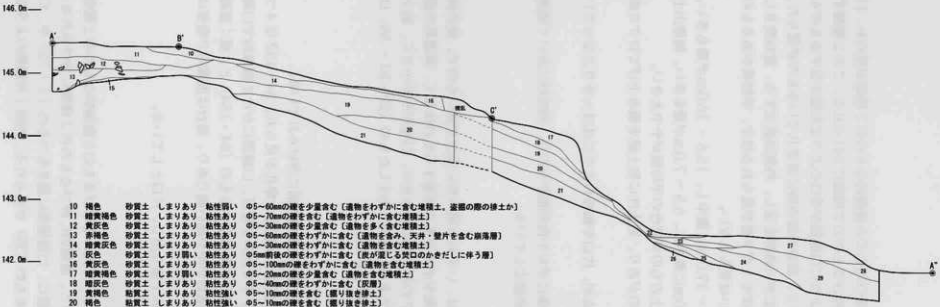


図13 A'-A" 土層図

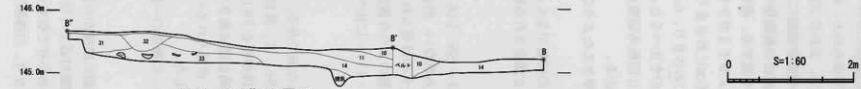


図14 B-B" 土層図

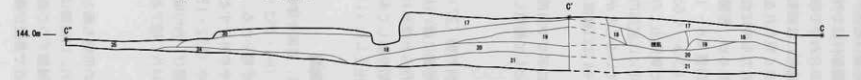


図15 C-C" 土層図

25 灰色 砂質土 しまり強い 粘性弱い Φ5～100mmの礫を含む〔遺物を多く含む灰層に地山の土が混じる造成土〕
26 暗褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5～20mmの礫をわずかに含む〔地山〕
27 明黄灰色 砂質土 しまり強い 粘性弱い Φ5～20mmの礫をわずかに含む〔管理道部分で硬く、遺物を含む堆積土〕
28 明灰色 砂質土 しまり弱い 粘性弱い Φ5～20mmの礫をわずかに含む〔灰層の一部〕
29 暗灰色 砂質土 しまり強い 粘性弱い Φ5～30mmの礫をわずかに含む〔管理道部分で硬い灰層〕
30 腐葉土
31 暗黄灰色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5～30mmの礫をわずかに含む〔遺物を含む操業後の堆積土〕
32 黄灰色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5～40mmの礫をわずかに含む〔遺物を含む操業後の堆積土〕
33 黒色 砂質土 しまり弱い 粘性あり Φ5～50mmの礫を礫を少量含む〔遺物を多く含む灰層〕
34 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性弱い Φ5～60mmの礫を少量含む〔上方に遺物を含む地山の流れ土〕
35 黄褐色 砂質土 しまりあり 粘性あり Φ5～20mmの礫をわずかに含む〔遺物を少量含む堆積土〕

第３節　遺物

碗

碗の形態は底部から口縁部にかけて丸みを帯びるものと直線的なものの２種類が見られ、口縁部は端部付近で外反するものと、直線的に伸びるものの２種類に分けられる。この２種類ずつの組み合わせで収まる。まれに 21・97 のように口縁部が受口のような形態を呈するものもある。底部には回転糸切痕が明瞭に残るものと、高台の接合時に消されているものが見られ、前者が多く見られる。高台の断面形はほとんどが三角形を呈し、外側は直立する。重ね焼きしてつぶれたものは台形を呈する。高台端部にはモミガラ痕が見られるほか、砂粒痕があるものが見られるが、形態によるモミガラや砂の違いは見られない。

碗は口径 9.8 ～ 18.6㎝におさまり、13.6 ～ 17.0㎝に集中し、15.6 ～ 16.0㎝が最も多い。高台は 4.3㎝～ 9.6㎝におさまり、6.5㎝～ 8.0㎝に集中し、6.5 ～ 7.0㎝が最も多い。物原出土のものと窯内出土のものを比べると、窯内出土のものが高台の平均値がやや大きい。

碗の中には底部内面に回転糸切痕が残るものがあり、粘土柱に粘土紐を積み上げてロクロ成形をしていることが分かる。

72、94 は口縁部に押さえたような痕があるが、片口や輪花のようにははっきりとなっていない。

内面にボロや自然釉の付着がなく、外面全体にボロや自然釉がかかり、焼成時において窯道具の蓋として使用したと想定される碗も何点か出土している。

無台碗

無高台の碗（27・53 ～ 55・116・117）は、いずれも碗の形に高台が無いもので、他の碗と比べ形態に違いは見られない。外面に自然釉やボロが多く付着するものはなく、窯道具の蓋として作られ使われたものは見られない。27 のみが他の碗と比べ、口径がやや小さく、粘土柱から切り離して未調整のような底部の形態である。窯内で出土したもの（27・53 ～ 55）は、物原で出土した（116・117）に比べ、やや小振りである。

その他碗類

28 は、底部を穿孔した碗である。直径５㎝程度の孔を焼成前に空けられている。

大碗（84・152 ～ 156）は、高台の根元に直径５㎜程度の穿孔が見られ、84・152 は４つの穿孔が見られる。全体が残る 84 は、体部下半で丸みを帯び、口縁部にかけて直線的で口縁端部でやや外反する。高台部は高さがあり端部がやや外反するもの（84・154）と、低く直線的なもの（152・153）が見られる。85 は、高台がやや高い碗であり、高台は直線的で端部は丸みを帯び、台付碗とした。

151 は片口碗であり、口縁部の一部をつまんで張り出し、片口としている。

小碗

小碗の形態も碗と同様に底部から口縁部にかけて丸みを帯びるものと直線的なものの２種類が見られ、口縁部は端部付近で外反するものと、直線的に伸びるものの２種類に分けられる。この２種類ずつの組み合わせで収まる。その他に、口縁端部に面をもつもの（1・75）や、口縁部付近で器壁が薄くなり、口縁部で肥厚するもの（35）が見られる。西坂１号窯期のような

小皿の形態をひくような 123 のような形態もわずかではあるが見られる。底部には回転糸切痕が明瞭に残るものと、高台の接合時に消されているものが見られ、後者が多く見られる。碗と同様に高台の断面形はほとんどが三角形を呈し、外側は直立する。重ね焼きしてつぶれたものは台形を呈する。高台端部にはモミガラ痕が見られるほか、砂粒痕があるものが見られるが、形態に違いは見られない。

小碗は口径 7.2 ～ 11.7㎝におさまり、8.6 ～ 10.0㎝に集中し、8.6 ～ 9.0㎝が最も多い。高台は 3.0 ～ 6.8㎝におさまり、3.6 ～ 5.5㎝に集中し、4.6 ～ 5.0㎝が最も多い。物原出土のものと窯内出土のものを比べると、窯内出土のものが口径、高台ともに平均値がやや大きい。

その他器種

48 ～ 50 は小坏であり、48・49 は片口となる。48 は底部から口縁部にかけてやや丸みを帯び、49、50 は口縁部が内湾する。

51 は小皿で、底部に回転糸切痕が見られる。56 は無高台の小皿である。口縁部、底部ともに厚みがあり、生焼けで黄白色を呈する。内面全面に自然釉とボロが付着し、仏器と思われる。その他に 52、164 の 2 点の仏器が出土している。52 は、上面に 2 個の小坏がつく。一つは口径 3.1㎝、器高 1.8㎝、底径 1.8㎝、もう一つは口径 2.9㎝、器高 2.0㎝、底径 1.6㎝であり、生焼けで黄白色を呈する。164 は、上面に本来は 3 個の小坏がついていた痕があるが、2 個が欠損している。残存している 1 個体は口径 2.8㎝、器高 1.7㎝、底径 1.8㎝である。

157・158 は高坏であり、口縁及び高台の端部の形状は残っていないため不明であるが、脚部の接合場所は中心よりのもの（158）と、底部端のもの（157）が見られる。159 は壺類の胴部と思われる。160・161 は短頸壺であり、口縁部は面をもち、やや内傾する。162・163 は長頸瓶である。頸部は直線的で、口縁部は大きく反り、頸部は直線的に立ち上がる。

焼台は小碗用（169）、碗用（170・171）、大碗用（172）が見られる。

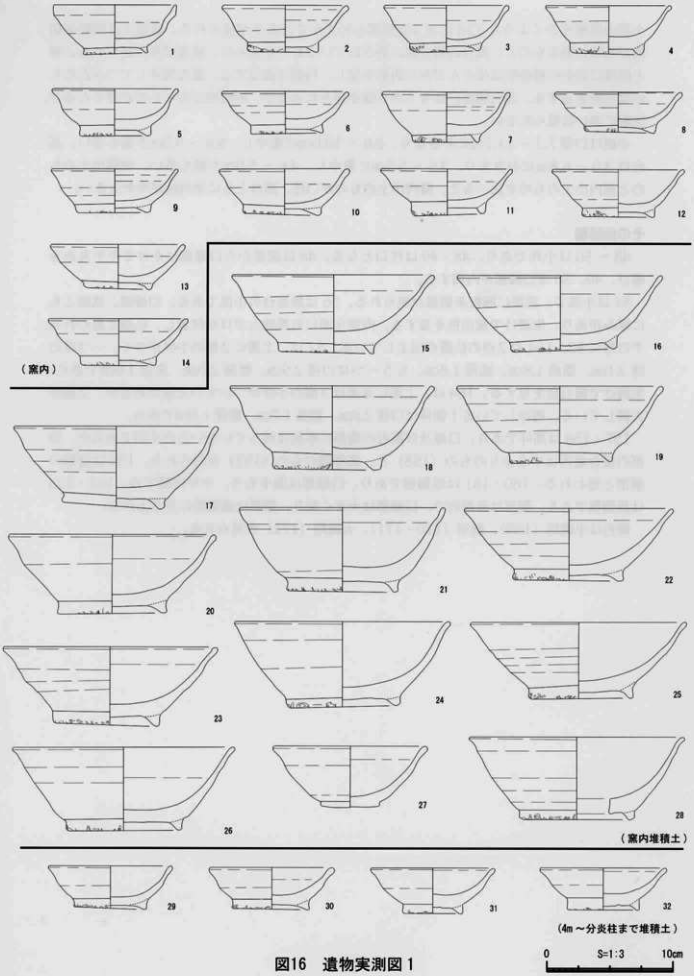

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
（窯内）
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
（窯内堆積土）
29
30
31
32
（4m～分炎柱まで堆積土）
0
S=1:3
10cm

図16　遺物実測図１

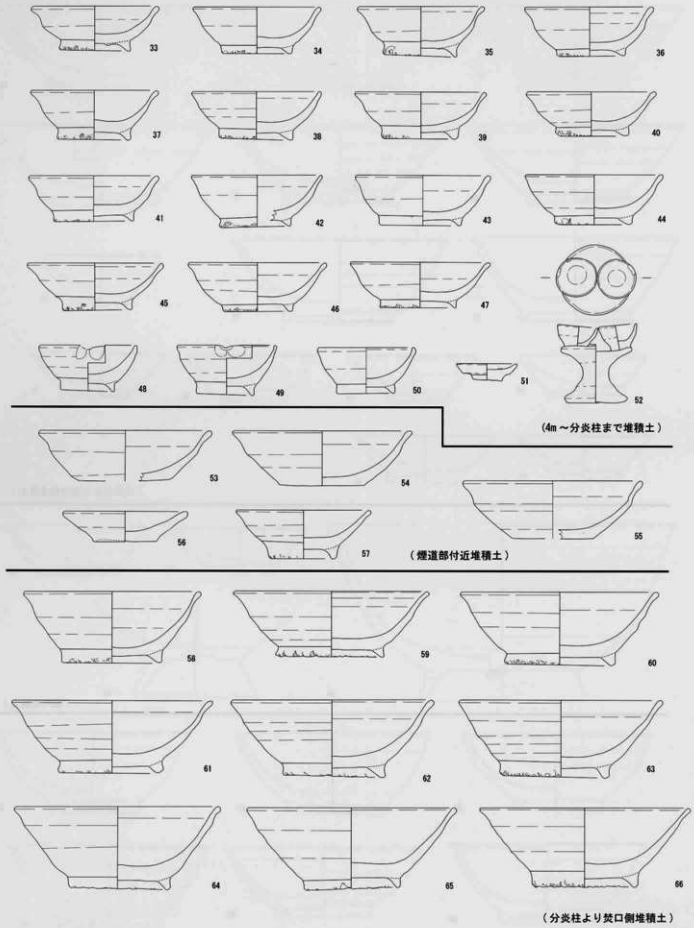
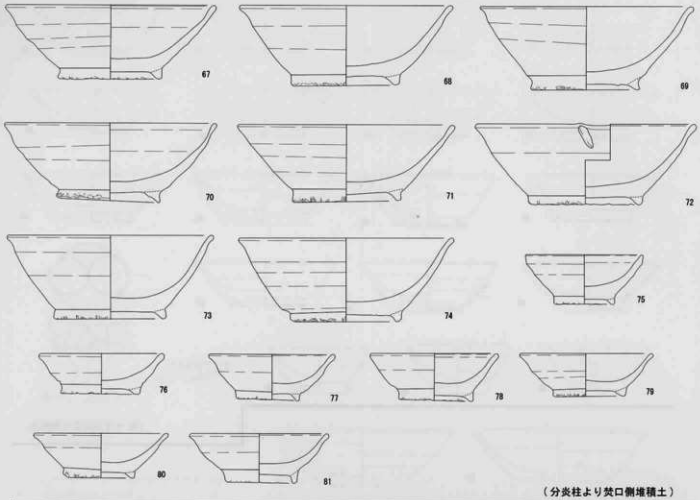
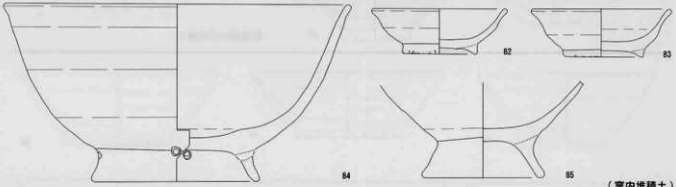

33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
(4m～分炎柱まで堆積土)
53
54
55
56
57
(煙道部付近堆積土)
58
59
60
61
62
63
64
65
66
(分炎柱より焚口側堆積土)
0
S=1:3
10cm

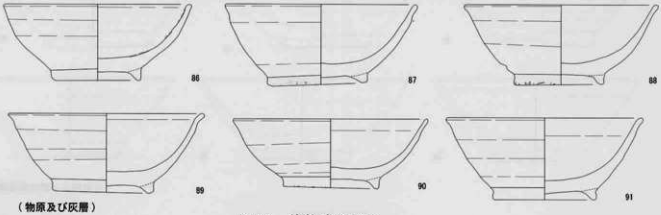
図17　遺物実測図 2



（分炎柱より焚口側堆積土）



（窯内堆積土）



（物原及び灰層）

図18　遺物実測図 3

0　S=1:3　10cm

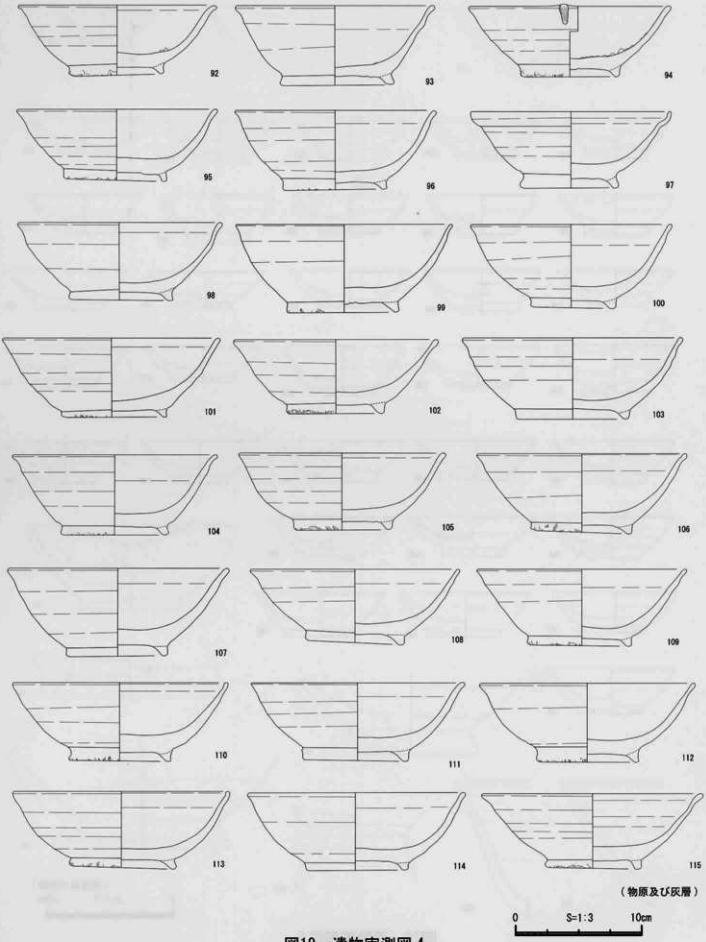

92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
（物原及び灰層）
0
S=1:3
10cm

図19　遺物実測図４

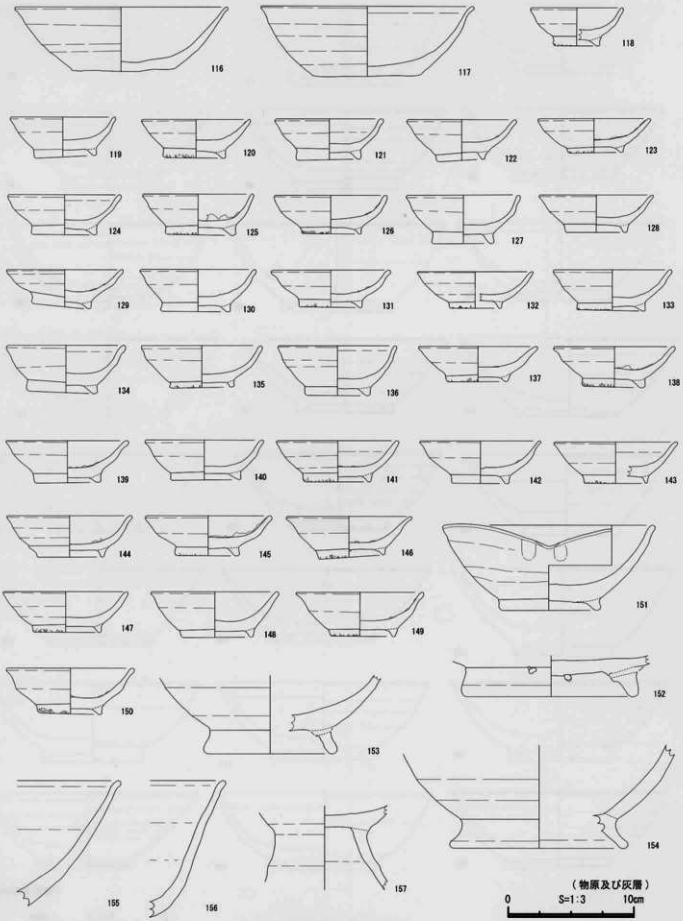

116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
（物原及び灰層）
0
S=1:3
10cm

図20　遺物実測図 5

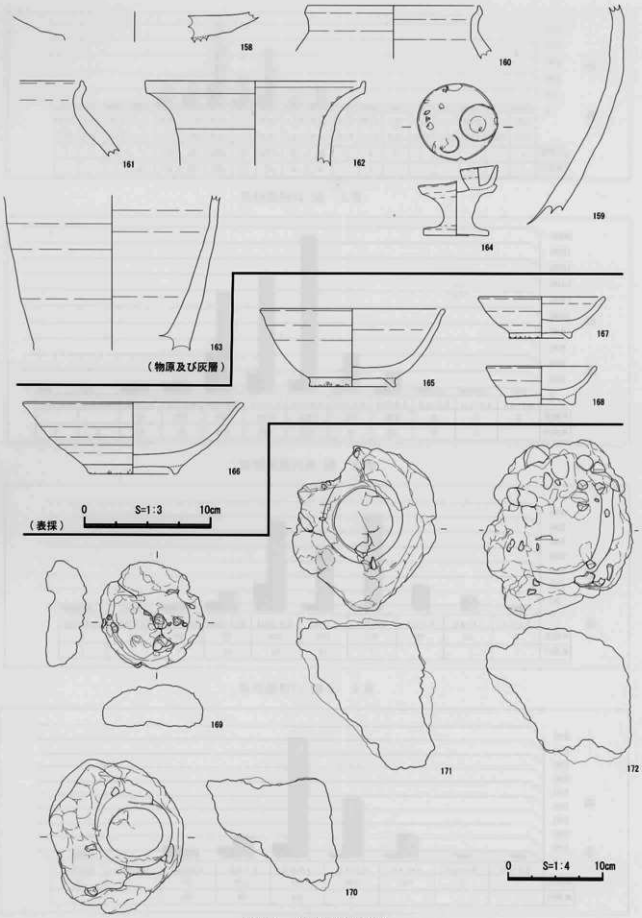

158
160
161
162
159
164
163
（物原及び灰層）
165
167
168
166
（表採）
0
S=1:3
10cm
169
171
172
170
0
S=1:4
10cm

図21　遺物実測図 6

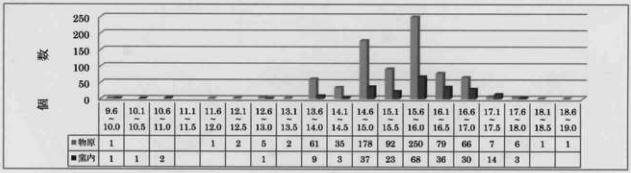


表2　碗 口径集計表

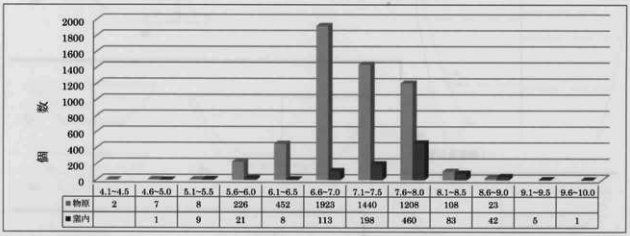


表3　碗 高台径集計表

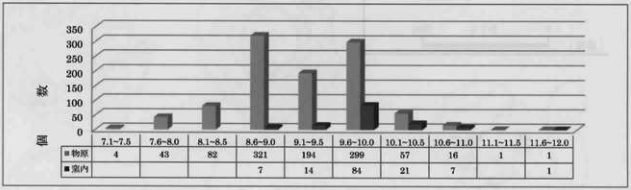


表4　小碗 口径集計表

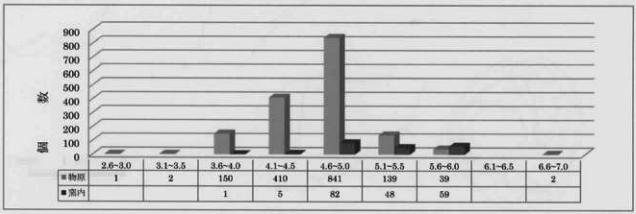


表5　小碗 高台径集計表

第４章　笹洞６号古窯跡

第１節　物原

灰層は調査地内において、南北約 8.6m、東西約 5.9m の範囲に見られ、財産区の管理のために設けられた道路部分より西側に遺物は見られない。灰層は、25 ～ 60cm の堆積があり、灰褐色や暗黄灰色を呈する。

窯体部分は調査地内であるｂ地点より東側に約５ｍ山側に窪みがあり、その部分と想定される。なお、窯体付近には造成されたような平坦面は見られない。

第２節　遺物

遺物は約 560 点が出土し、器種は小椀、椀、皿、段皿、耳皿、蓋、短頸壺、広口瓶、長頸瓶、平瓶が出土している。全体のうち約６％が須恵器であり、器種は坏、蓋、瓶、鉢が見られる。

椀は大きさにより口径 10cm 未満の小椀（１～４）と 15cm 以上の椀（５～７）に分かれる。１・２・４は底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は外反して端部を水平にする。高台は外側下方に稜を有さず下半が内湾する。３の口縁端部はわずかに外反し、高台は直線的で細長く、端部は丸みを帯びる。５は口縁端部が強く外反し、高台は下半が内湾しつつ、端部は丸みを帯びる。６は口縁部が強く外反し、高台は厚みのある三日月高台である。７は、腰の張りが比較的弱く緩やかに立ち上がり口縁端部がわずかに外反する。高台は細長くてハの字状に外に開く三日月高台で内側下半の内湾は弱い。高台のみが残存する８は内湾の弱い三日月高台であり、底部外面に線刻が見られる。

皿（９～ 16）は、15cm 未満のもの（９～ 13）と 17cm 以上の大型のもの（14 ～ 16）に分かれる。底部から口縁部にかけては丸みを帯びるもの（９・10・13・15・16）と直線的なもの（11・12・14）があり、口縁部は強く屈曲する。９の高台は角高台に近く端部はやや丸く収める。10・11 の高台は直線的で端部は丸くなり、12・13 の高台はわずかにハの字状に開いて丸く収める。14 の高台は外側下方に稜を有さず下半が内湾しつつ下半が尖る。15 の高台は細長く、断面二等辺三角形を呈する。16 の高台は三日月高台である。

段皿（17 ～ 21）のうち、形の分かる 17 ～ 19 は広縁のものである。17・18 の口縁部は直線的であり、19 は口縁端部はやや外に開く。高台は 17・18 は断面二等辺三角形、20 は角高台に近い形を呈し、19・21 は外側下方に稜を有さず下半が内湾しつつ尖る。20・21 は内面に重ね焼きの痕が見られる。

22 は広口瓶であり、ラッパ状に大きく開く口頸部で口縁端部下端は丸みを帯びる。23 は灰釉陶器、31 ～ 33 は須恵器の長頸瓶である。長頸瓶は大きく開き、口縁部は下方に引き出すもの（23・31・33）と下方が丸みを帯びるもの（22・32）がある。24 ～ 30 は底部及び底部から体部下半が残存している。高台は付高台で、断面は台形を呈するが、ややつぶれているものもある。施釉がはっきり分かるものと分からないものが見られ、底部外面に糸切痕が見られるもの（24）、モミガラ痕があるもの（27）が見られる。

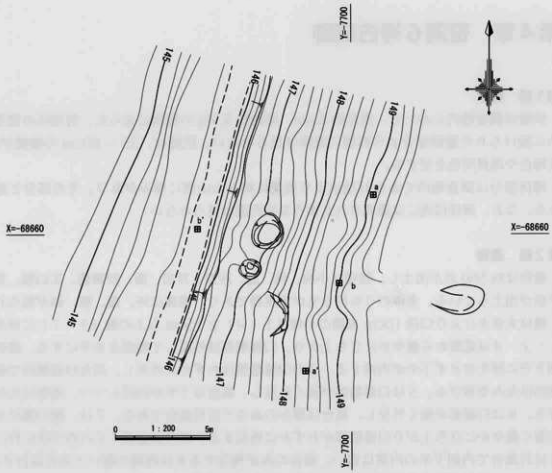


図22　大森笹洞6号古窯跡調査前地形測量図

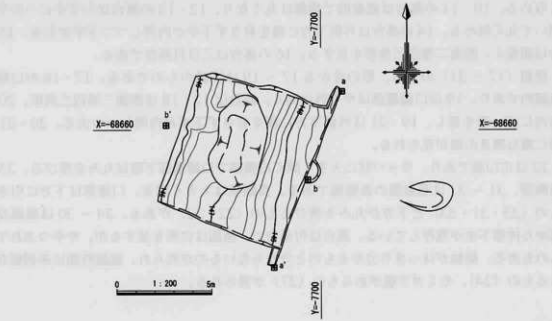


図23　大森笹洞6号古窯跡調査後地形測量図

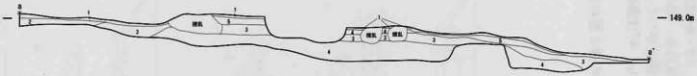


図24　a-a' 土層図

1　腐葉土
2　黄灰色　砂質土　しまり弱い　粘性弱い　Φ5～20mmの礫を少量含む〔地山の再堆積層〕
3　灰褐色　砂質土　しまりあり　粘性弱い　Φ5～20mmの礫を少量含む〔灰層の一部。遺物含む〕
4　暗灰色　砂質土　しまりあり　粘性弱い　Φ5～20mmの礫を少量含む〔灰層。遺物含む〕
5　暗黄灰色　砂質土　しまりあり　粘性弱い　Φ5～20mmの礫を少量含む〔灰層の一部。遺物含む〕
6　暗黄灰色　砂質土　しまりあり　粘性弱い　Φ5～30mmの礫をわずかに含む〔灰層の一部。遺物やや含む〕
7　黄灰色　砂質土　しまり弱い　粘性あり　Φ5～30mmの礫をわずかに含む〔灰層と地山が混じる。遺物やや含む〕
8　黄褐色　砂質土　しまり弱い　粘性弱い　Φ5～40mmの礫をわずかに含む〔廃棄後の堆積土。〕

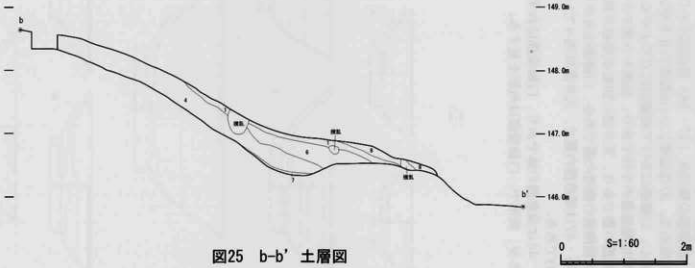


図25　b-b' 土層図

短頸壺（34・35）は、体部上半から口縁部にかけて残存する。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。36は耳皿であり、半分程度が残存する。

須恵器の無台坏（37・38）は底部から口縁部にかけて丸みをもって立ちあがり、端部は丸く収める。37は底部に2cm程度の孔が空いている。39は須恵器の坏身であり、底部付近で屈曲し、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。40・41は宝珠つまみのつく須恵器の坏蓋である。42は須恵器の小坏であり、底部から緩やかに立ち上がり、口縁部はやや角張る。43・44は須恵器の蓋であり、天井部に回転糸切痕が見られ、口縁部は直線的で端部は丸く収める。45は灰釉陶器の壺用の蓋である。口縁部は丸みを帯び、天井部には高さの低いつまみ部分がつく。46・47は須恵器の蓋で、天井部は残っていない。46は口縁端部がわずかに外反し、47は直線的である。

48は須恵器の鉢であり、口縁端部はわずかに凹みが見られる。49は灰釉陶器の鉢と思われるが、筒形で、口縁端部は角形を呈する。

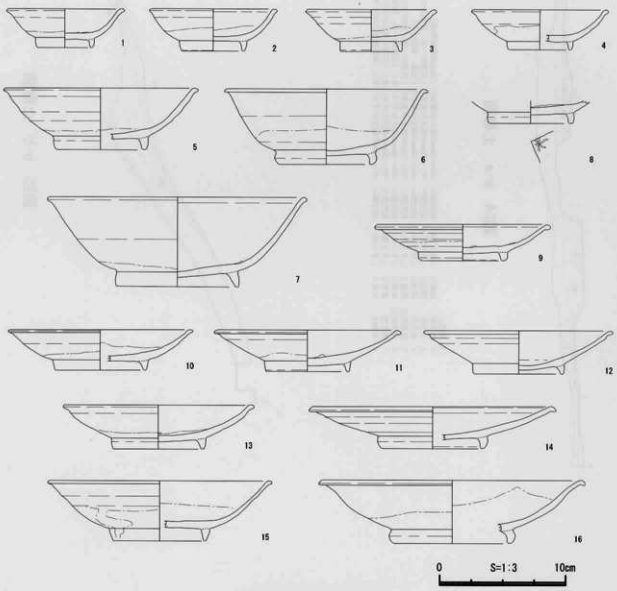


図26　遺物実測図1

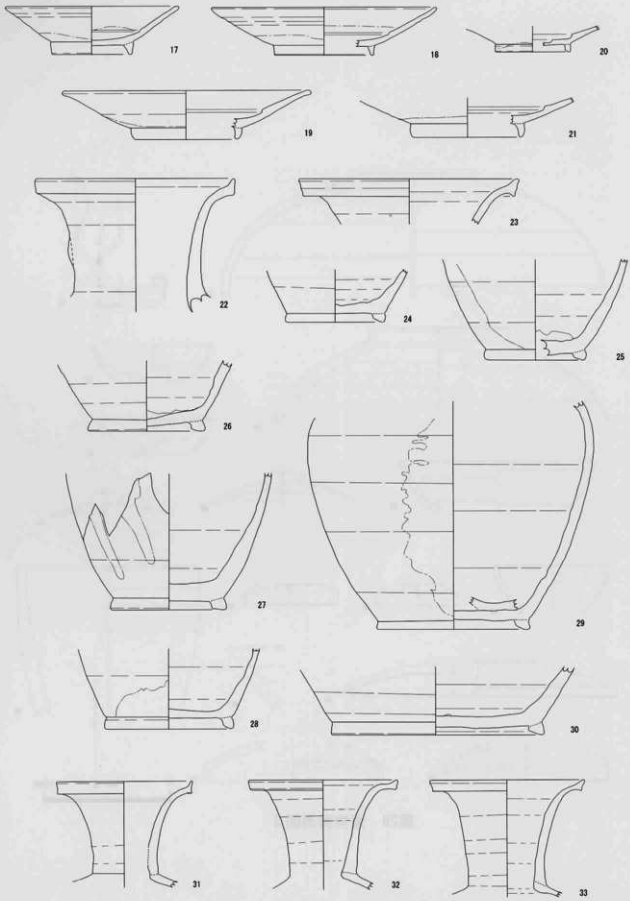


図27　遺物実測図 2

0　S=1:3　10cm

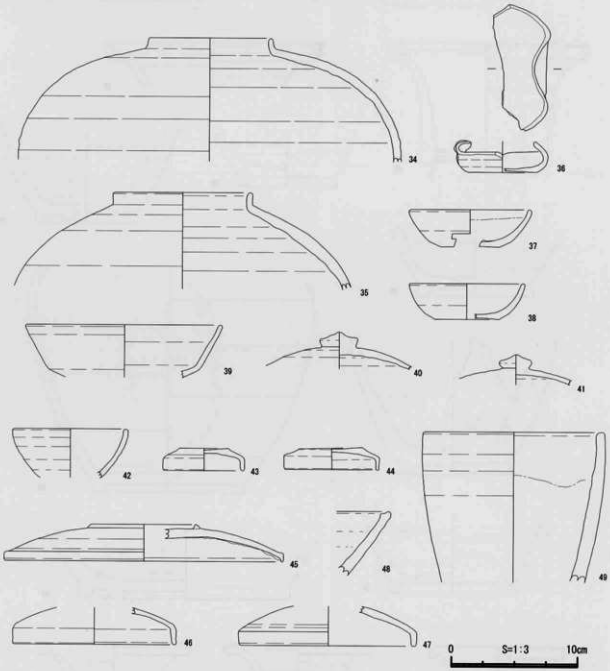


図28　遺物実測図 3

図版	写真	出土位置	器種	口径	器高	最大径 高台径	高台	糸切痕	その他
1	1	南内	小椀	9.5	3.9	4.9	モミガラ	—	生焼け。
2		南内	小椀	(9.6)	3.7	5.2	モミガラ	○	生焼け。
3		南内	小椀	9.6	3.7	4.5	モミガラ	○	生焼け。
4		南内	小椀	9.7	3.8	5.2	モミガラ	—	生焼け。
5		南内	小椀	(9.7)	3.8	5.3	モミガラ	○	生焼け。
6	6	南内	小椀	9.7	3.3	5.5	モミガラ	—	生焼け。
7	7	南内	小椀	9.8	4.0	4.9	モミガラ	○	生焼け。
8	8	南内	小椀	(9.8)	3.5	5.2	モミガラ	○	生焼け。
9		南内	小椀	(9.8)	3.5	5.4	モミガラ	—	生焼け。
10	10	南内	小椀	9.9	3.6	5.7	モミガラ	○	生焼け。
11		南内	小椀	10.1	3.6	5.2	モミガラ	○	生焼け。
12		南内	小椀	10.2	3.8	5.3	モミガラ	—	生焼け。
13	13	南内	小椀	10.3	3.5	(4.7)	モミガラ	○	生焼け。
14		南内	小椀	(10.7)	3.8	5.5	モミガラ	○	生焼け。
15		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	15.7	6.1	7.1	モミガラ	○	生焼け。
16	16	4m～5m谷粘まで堆積土	椀	15.9	5.9	7.9	モミガラ	○	生焼け。
17		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	15.9	6.3	7.5	モミガラ	○	生焼け。
18	18	4m～5m谷粘まで堆積土	椀	15.9	6.6	7.8	モミガラ	○	生焼け。
19		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	16.0	6.0	7.7	モミガラ	○	生焼け。
20		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	16.0	6.2	(8.0)	モミガラ	○	底部内面に重ね焼きの跡あり。
21	21	4m～5m谷粘まで堆積土	椀	(16.0)	6.6	8.1	モミガラ	○	生焼け。
22		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	(16.4)	5.7	8.1	モミガラ	○	生焼け。
23		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	16.7	6.1	7.9	モミガラ	○	生焼け。
24		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	16.8	6.7	8.2	モミガラ	○	生焼け。
25		4m～5m谷粘まで堆積土	椀	17.0	6.7	7.8	モミガラ	○	生焼け。
26	26	4m～5m谷粘まで堆積土	椀	17.3	6.6	8.5	モミガラ	○	生焼け。
27	27	4m～5m谷粘まで堆積土	無台椀	(11.8)	4.8	(4.0)	—	○	生焼け。
28	28	4m～5m谷粘まで堆積土	壁孔蓋	(16.8)	6.6	(8.4)	モミガラ	—	生焼け。底部に直径 5cm程度の孔が穿孔されている。
29		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	9.5	3.3	5.4	モミガラ	—	生焼け。
30		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	9.5	3.3	5.9	モミガラ	—	生焼け。
31	31	4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(9.6)	3.7	(4.4)	モミガラ	—	生焼け。
32		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(9.8)	3.4	(5.5)	モミガラ	—	生焼け。
33		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	9.8	3.5	5.4	モミガラ	—	生焼け。
34	34	4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(9.8)	3.7	(5.2)	モミガラ	—	生焼け。
35		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	9.8	3.9	5.5	モミガラ	—	生焼け。
36	36	4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	9.9	3.9	5.0	モミガラ	—	生焼け。
37	37	4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(9.9)	4.0	5.5	モミガラ	—	生焼け。
38		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	10.0	3.8	5.4	モミガラ	○	生焼け。
39		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(10.0)	3.8	5.5	モミガラ	○	生焼け。
40		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	10.0	3.6	5.2	モミガラ	—	生焼け。
41		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	10.0	3.6	6.0	モミガラ	—	生焼け。
42		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(10.1)	4.1	5.3	モミガラ	○	生焼け。
43		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(10.3)	4.0	6.1	モミガラ	—	生焼け。
44		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(10.5)	4.0	5.4	モミガラ	○	生焼け。
45		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	10.5	3.7	5.2	モミガラ	○	
46		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	(10.7)	3.9	5.1	モミガラ	—	生焼け。
47		4m～5m谷粘まで堆積土	小椀	10.8	3.7	5.8	モミガラ	○	
48	48	4m～5m谷粘まで堆積土	托子付椀	7.5	3.7	4.1	—	—	
49		4m～5m谷粘まで堆積土	小坏	7.4	3.7	4.4	モミガラ	—	
50	50	4m～5m谷粘まで堆積土	托子付坏	7.7	4.0	4.4	モミガラ	—	二線部の一部を片口にしている。
51	51	4m～5m谷粘まで堆積土	小皿	4.6	1.3	2.0	—	○	外面の一部に自然釉、内面全面に自然釉とボロ付け痕。
52	52	4m～5m谷粘まで堆積土	小型七輪	5.4	6.3	4.6	—	○	生焼け。
53		埋蔵部ピット堆積土	無台椀	(13.4)	4.0	7.1	—	○	生焼け。
54	54	埋蔵部ピット堆積土	無台椀	(13.8)	4.4	6.6	—	○	生焼け。
55		埋蔵部ピット堆積土	無台椀	(13.9)	4.6	(6.3)	—	○	生焼け。
56		埋蔵部ピット堆積土	小皿	(9.6)	2.4	4.8	—	○	生焼け。
57		埋蔵部ピット堆積土	小椀	10.4	3.8	4.9	モミガラ	○	生焼け。
58		分光社より第1堆積土	椀	(13.7)	5.6	(7.4)	モミガラ	○	生焼け。
59	59	分光社より第1堆積土	椀	(15.1)	5.2	8.1	モミガラ	○	生焼け。
60		分光社より第1堆積土	椀	(15.3)	5.7	8.0	モミガラ	○	生焼け。
61		分光社より第1堆積土	椀	(15.6)	5.7	7.5	モミガラ	○	生焼け。
62		分光社より第1堆積土	椀	15.7	6.1	7.8	モミガラ	○	生焼け。
63		分光社より第1堆積土	椀	15.9	6.1	8.0	モミガラ	○	生焼け。
64		分光社より第1堆積土	椀	(16.0)	(6.5)	7.7	モミガラ	○	生焼け。
65		分光社より第1堆積土	椀	(16.2)	6.4	7.3	モミガラ	○	生焼け。
66		分光社より第1堆積土	椀	(16.4)	6.3	7.9	モミガラ	○	生焼け。
67		分光社より第1堆積土	椀	16.5	5.9	7.9	モミガラ	○	生焼け。
68		分光社より第1堆積土	椀	16.6	6.3	7.9	モミガラ	—	生焼け。
69		分光社より第1堆積土	椀	16.6	6.6	8.1	モミガラ	—	生焼け。
70		分光社より第1堆積土	椀	(16.6)	6.1	7.6	モミガラ	○	生焼け。
71		分光社より第1堆積土	椀	(16.8)	6.1	7.9	モミガラ	○	生焼け。
72		分光社より第1堆積土	椀	(17.2)	6.4	8.7	モミガラ	○	生焼け。
73		分光社より第1堆積土	椀	(16.1)	6.6	8.4	モミガラ	○	生焼け。
74	74	分光社より第1堆積土	椀	(16.7)	6.6	7.9	モミガラ	○	生焼け。
75		分光社より第1堆積土	小椀	(9.1)	3.9	(4.4)	モミガラ	—	生焼け。
76		分光社より第1堆積土	小椀	9.3	3.7	5.0	砂	○	生焼け。
77	77	分光社より第1堆積土	小椀	9.7	3.6	4.7	モミガラ	○	生焼け。
78		分光社より第1堆積土	小椀	10.0	3.7	5.6	モミガラ	○	生焼け。高台貼り付け用に糸切痕をナデ消し。
79		分光社より第1堆積土	小椀	10.3	3.4	5.3	モミガラ	○	ヤヤ生焼け。
80		分光社より第1堆積土	小椀	10.3	3.5	5.0	モミガラ	○	ヤヤ生焼け。
81	81	分光社より第1堆積土	小椀	10.8	3.9	5.2	砂	○	生焼け。内外面に自然釉付け痕。高台貼り付け用に糸切痕をナデ消し。
82		現内堆積土	小椀	(10.4)	3.6	5.5	モミガラ	○	生焼け。
83		現内堆積土	小椀	(10.8)	3.8	5.9	モミガラ	○	生焼け。
84		現内堆積土	大鉢	(27.0)	14.1	12.7	砂	—	生焼け。高台上部に直径 5mm程度の孔が4つ穿られる。
85		現内堆積土	台付鉢	—	(7.4)	9.1	—	○	生焼け。
86		北東区堆積土	椀	(14.5)	6.0	6.4	砂	○	外面の一部に自然釉、内面全面に自然釉とボロ付け痕。
87		北東区堆積土	椀	(14.8)	6.4	7.1	砂	○	生焼け。
88		北東区堆積土	椀	15.0	6.3	6.8	モミガラ	—	生焼け。
89		北東区堆積土	椀	15.1	6.2	7.3	砂	○	内外面の一部に自然釉とボロ付け痕。底部内面に重ね焼きの跡あり。
90		北西区堆積	椀	(15.3)	5.5	7.2	砂	○	内外面の一部に自然釉付け痕。底部内面に重ね焼きの跡とボロあり。
91		北西区堆積土	椀	(15.2)	6.5	(7.9)	砂	○	内外面の一部に自然釉付け痕。
92	92	北東区堆積土	椀	15.4	5.5	(6.9)	モミガラ	○	底部内面に重ね焼きの跡あり。内面に自然釉、ボロ付け痕。
93		北西区堆積	椀	15.5	6.3	8.3	砂	○	内面の一部に自然釉付け痕。
94		北西区堆積土	椀	(15.5)	5.7	7.1	モミガラ	—	内面に自然釉とボロ付け痕。
95		北西区堆積土	椀	(15.6)	5.6	7.6	モミガラ	○	内外面の一部に自然釉付け痕。
96	96	北西区堆積土	椀	15.6	6.3	7.5	砂	○	内面の一部に自然釉とボロ付け痕。底部内面に重ね焼きの跡あり。
97		北西区堆積土	椀	(15.6)	5.6	7.1	砂	—	内外面の一部に自然釉付け痕。底部内面に重ね焼きの跡あり。
98		北西区堆積土	椀	(15.7)	6.1	7.5	粗土ガラ、砂	—	内外面の一部に自然釉付け痕。
99		北西区堆積土	椀	(15.7)	6.4	7.8	粗土ガラ	○	生焼け。
100	100	北西区堆積土	椀	(15.8)	6.6	8.1	砂	—	内外面の一部に自然釉付け痕。底部内面に重ね焼きの跡とボロあり。
101		北西区堆積土	椀	(15.8)	5.8	7.2	粗土ガラ、砂	○	外面の一部に自然釉、内面の一部に自然釉とボロ付け痕。
102		北東区堆積土	椀	15.9	5.8	7.0	モミガラ	○	生焼け。
103		北東区堆積土	椀	(15.9)	6.0	7.7	砂	○	内外面の一部に自然釉とボロ付け痕。底部内面に重ね焼きの跡あり。
104		北東区堆積土	椀	(15.9)	6.4	7.9	粗土ガラ、砂	○	内外面の一部に自然釉付け痕。内面に ボロ付け痕。
105		北東区堆積土	椀	(16.0)	6.1	7.1	モミガラ	○	内外面の一部に自然釉。
106		現内区堆積土	椀	16.1	6.2	7.2	モミガラ	○	内外面の一部に自然釉付け痕。
107		北東区堆積土	椀	(16.1)	6.4	8.8	砂	○	外面の一部に自然釉、内面の一部に自然釉とボロ付け痕。
108		北西区堆積土	椀	16.2	5.8	7.0	砂	○	外面の一部に自然釉付け痕。底部内面に重ね焼きの跡あり。
109		現内区堆積土	椀	16.3	6.0	7.7	モミガラ	○	内外面の一部に自然釉付け痕。
110		北東区堆積	椀	(16.4)	6.1	7.6	モミガラ	—	
111		北東区堆積土	椀	16.4	6.1	7.6	砂	○	内面の一部に自然釉とボロ付け痕。
112		北西区堆積	椀	16.4	6.2	7.5	モミガラ	○	内面の一部に自然釉とボロ付け痕。
113	113	現内区堆積土	椀	(16.7)	6.0	7.7	モミガラ	○	内外面の一部に自然釉付け痕。底部内面に ボロと重ね焼きの跡あり。
114		北西区堆積土	椀	(16.9)	6.1	7.4	砂	—	内外面の一部に自然釉。内面に ボロとボロ付け痕。
115		北西区堆積土	椀	(17.1)	5.8	6.8	モミガラ	○	内外面の一部に自然釉とボロ付け痕。
116		北西区堆積土	無台椀	(16.4)	5.1	8.0	—	○	内外面の一部に自然釉付け痕。
117	117	南東区区堆	無台椀	16.4	5.5	8.2	—	○	内外面の一部に自然釉付け痕。内面に ボロ付け痕。

表6　5号窯出土遺物観察表1

図版	写真	出土位置	器種	口径	器高	最頂部径	焼台	糸切痕	その他
118		南西区地域1	小椀	(7.0)	2.9	3.3	モミガラ	—	内外面に一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
119		南西区地域1	小椀	8.0	3.1	4.5	砂	○	内外面に一部に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
120		南西区地域1	小椀	8.2	3.0	4.4	モミガラ	○	内外面に一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
121	121	南西区地域1	小椀	8.2	3.2	(4.8)	砂	○	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
122		土東区地域1	小椀	(8.4)	3.3	3.3	砂	—	
123	123	北東区地域1	小椀	8.6	2.7	4.0	モミガラ	—	内面全面と外面の一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
124		南西区地域1	小椀	8.6	3.1	4.8	砂	—	内外面に一部に目跡付着。底部内面にボロケ重ね焼きの跡あり。
125		北西区地域1	小椀	8.6	3.3	5.2	モミガラ	○	内面全面と外面の一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
126		物部遺構1	小椀	(8.6)	3.0	4.4	モミガラ	—	内外面に一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
127		北東区地域1	小椀	8.7	3.8	(4.5)	砂	—	内外面に一部に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡と ボロケ付。
128		北東区地域1	小椀	(8.8)	2.9	4.5	砂	—	内面全面と外面の一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
129		北西区地域	小椀	8.9	2.9	4.3	砂	—	内面全面と外面の一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
130		南西区地域1	小椀	8.9	3.1	(5.2)	砂	—	内外面に目跡付着。ボロケ付着。
131		北西区地域	小椀	(9.0)	2.9	(4.6)	モミガラ	○	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。
132		北西区地域	小椀	(9.0)	2.9	(3.8)	モミガラ	—	内外面に一部に目跡付着。内面にボロケ付着。
133		北東区地域1	小椀	9.0	3.2	5.2	砂	—	内外面に一部に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
134		南東区地域1	小椀	9.0	3.7	5.0	砂	—	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。
135		北西区地域1	小椀	9.1	3.2	5.2	モミガラ、砂	—	内外面に一部に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡と ボロケ付。
136		北東区地域1	小椀	(9.1)	3.9	(4.7)	砂	○	内外面に一部に目跡付着。内面にボロケ付。
137	137	北東区地域1	小椀	9.2	2.8	4.5	モミガラ	○	外面に一部に目跡付着。内面全面に目跡付着。
138	138	北東区地域1	小椀	9.3	3.2	4.5	モミガラ	○	外面の一部に目跡付着。内面に目跡付着。ボロケ付着。
139		北西区地域1	小椀	9.4	3.3	4.8	砂	—	外面の一部に目跡付着。内面全面に目跡付着。ボロケ付着。
140		北西区地域1	小椀	9.4	3.3	4.8	モミガラ、砂	—	内外面に一部に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡と ボロケ付。
141	141	北西区地域1	小椀	9.4	3.2	5.0	モミガラ	○	内面全面と外面の一部に目跡付着。ボロケ付着。
142		南西区地域1	小椀	9.4	3.3	4.2	砂	—	内面に目跡付着。ボロケ付着。
143		北西区地域	小椀	(9.5)	3.2	(4.7)	モミガラ	—	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。
144		北東区地域1	小椀	9.5	3.2	(5.0)	砂	—	内外面に一部に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
145		南西区地域2	小椀	9.6	3.1	4.6	モミガラ、砂	—	内面全面と外面の一部に目跡付着。内面にボロケ付。
146		南東区地域	小椀	9.6	3.2	(5.0)	モミガラ	○	内外面に一部に目跡付着。内面にボロケ付。
147		北西区地域	小椀	9.6	3.2	5.1	モミガラ	—	
148		北東区地域北	小椀	9.7	3.6	5.2	砂	○	やや歪曲。
149		南西区地域2	小椀	9.8	3.5	4.8	モミガラ	—	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。
150		北西区地域1	小椀	9.8	3.6	4.6	モミガラ	—	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
151		北東区地域1	片口鍋	16.3	6.7	7.4	砂	○	
152	152	北東区地域1	大鍋	—	(3.0)	12.9	—	—	底台上部に直径 5mm 程度の孔が 4 つ残られる。底部内面に重ね焼きの跡あり。
153		北西区地域1	大鍋	—	6.1	(9.6)	—	—	底台上部に直径 3mm 程度の孔が 2 つ残られる。底部内面に重ね焼きの跡あり。
154		北西区地域1	大鍋	—	(8.2)	(13.4)	—	—	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
155	155	北西区地域	大鍋	—	(9.9)	—	—	—	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。
156		北東区地域1	大鍋	—	(11.2)	—	—	—	
157	157	北西区地域1	鳥杯	—	(6.6)	—	—	—	生焼け。
158		南西区地域1	鳥杯	—	(2.4)	—	—	—	
159	159	北東区地域1	壺	—	(17.2)	—	—	—	外面の一部に目跡。
160		北東区地域2	短頸壺	(13.3)	(4.1)	—	—	—	内外面に目跡付着。ボロケ付着。
161	161	北西区地域1	短頸壺	—	(5.9)	—	—	—	
162	162	北西区地域1	長頸壺	(17.2)	(6.7)	—	—	—	外面の一部に目跡。内面全面に目跡付着。ボロケ付着。
163	163	北西区地域1	長頸壺	—	(12.1)	—	—	—	外面と底部の一部に目跡付着。内面に墨付着。
164	164	南西区地域1	小型壺	5.9	5.6	4.9	—	○	上底全面に ボロケ付。
165		表採	鍋	(14.3)	6.6	9.6	モミガラ	○	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付。
166		表採	鍋	(17.0)	5.6	9.5	モミガラ	○	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付。
167		表採	小鍋	(9.7)	3.2	4.5	モミガラ	—	
168		表採	椀	8.4	3.0	5.0	砂	—	内外面の一部に目跡付着。
169		4 m～北西柱まで堆積土	焼台	11.2 × 11.0 × 4.5					
170		南内	焼台	16.7 × 14.1 × 11.9					
171		南内	焼台	17.5 × 15.1 × 15.6					
172	172	南内	焼台	18.9 × 15.8 × 13.4					

表7　5号窯出土遺物観察表２

図版	写真	出土位置	種別	器種	口径	器高	最頂部径	釉	その他
1		北区地域２	灰釉陶器	小椀	(6.9)	3.1	4.2	○	内面に目跡とボロケ付着。
2	2	南区地域１	灰釉陶器	小椀	(9.7)	3.3	4.7	○	
3		南区地域１	灰釉陶器	小椀	(10.0)	3.3	4.7	○	
4		北区地域１	灰釉陶器	小椀	(10.5)	3.2	(4.8)	○	内面全体に目跡付着。底部に糸切痕あり。
5		北区地域１	灰釉陶器	椀	(14.9)	4.9	(6.8)	○	
6	6	北区地域１	灰釉陶器	椀	(15.5)	6.0	7.1	○	
7	7	南区地域１	灰釉陶器	椀	(20.2)	7.1	9.5	○	内外面に沿着痕あり。内面に目跡付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
8		南区地域１	灰釉陶器	椀	—	(1.8)	6.4	○	底部外面に線刻が。線刻内、内面全体に目跡とボロケ付。
9		北区地域１	灰釉陶器	皿	(13.4)	2.9	6.4	○	内面に目跡痕。ボロケ付。
10		北区地域１	灰釉陶器	皿	(14.0)	3.2	(7.0)	○	内外面に一部に目跡付着。ボロケ付着。底部内面に重ね焼きの跡あり。
11		南区地域１	灰釉陶器	皿	(14.1)	3.2	6.5	○	内外面の一部に目跡付着。ボロケ付着。
12		北区地域１	灰釉陶器	皿	(14.6)	3.5	(6.9)	○	底部内面に重ね焼きの跡あり。
13		北区地域１	灰釉陶器	皿	(14.6)	3.5	7.0	○	
14		北区地域１	灰釉陶器	皿	(18.8)	3.4	(7.8)	○	内面に目跡付着。
15		北区地域１	灰釉陶器	皿	(17.4)	4.8	(7.7)	○	
16		北区地域１	灰釉陶器	皿	(20.5)	5.0	(9.1)	○	底部内面に重ね焼きの跡あり。
17	17	南区地域１	灰釉陶器	段皿	(13.6)	3.8	6.2	○	内面に一部に目跡付着。
18		南区地域１	灰釉陶器	段皿	(17.7)	3.9	(7.6)	○	
19	19	北区地域１	灰釉陶器	段皿	(19.2)	3.8	(8.0)	○	内面に ボロケ付着。
20		南区地域１	灰釉陶器	段皿	—	(2.1)	5.8	○	底部内面に重ね焼きの跡あり。
21		北区地域１	灰釉陶器	段皿	—	(3.1)	(8.5)	○	底部内面に重ね焼きの跡あり。
22	22	北区地域１	灰釉陶器	広口瓶	15.6	(10.7)	—	—	内外面の一部に目跡付着。焼台として転用か。
23		北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	(17.2)	(3.7)	—	○	ほぼ全体に目跡付着。
24		北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(4.2)	7.5	○	内外面の一部に目跡付着。ボロケ付着。底部に糸切痕あり。
25		北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(8.0)	(7.6)	○	内外面の一部に目跡付着。ボロケ付着。
26		北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(5.6)	8.6	○	内外面の一部に目跡付着。ボロケ付着。
27		南区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(11.0)	(8.6)	○	付高台。高台に モミガラ痕あり。
28		北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(6.3)	9.9	○	ほぼ全体に目跡とボロケ付着。
29	29	北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(18.1)	11.6	—	胴部径 22.7。内・外面に目跡とボロケ付着。内面に沿着物あり。
30	30	北区地域１	灰釉陶器	長頸壺	—	(5.4)	16.4	—	内外面の一部に目跡付着。内面に ボロケ付着。
31	31	南区地域１	須恵器	小椀	(10.6)	(8.4)	—	—	
32	32	北区地域１	須恵器	長頸瓶	11.6	(8.8)	—	—	内外面に目跡付着。
33		北区地域１	須恵器	長頸瓶	(12.1)	(9.4)	—	—	内外面の一部に目跡付着。ボロケ付着。
34	34	北区地域１	灰釉陶器	短頸壺	(9.6)	(9.8)	—	○	外面に目跡付着。
35	35	南区地域１	灰釉陶器	短頸壺	10.8	(7.6)	—	○	
36	36	北区地域１	須恵器	甕	(10.8)	2.5	(5.5)	—	底外面に糸切痕あり。
37		北区地域１	須恵器	無台椀	(9.3)	3.0	(4.9)	—	底部に厚 2cm の厚さあり。内外面の一部に目跡痕。ボロケ付着。底部外面に糸切痕あり。
38		北区地域１	須恵器	無台椀	(9.0)	2.9	(5.0)	—	底部内面にヘラ切り。
39		北区地域１	須恵器	台付	(15.4)	(4.2)	—	—	内面に一部ボロケ付着。
40	40	北区地域１	須恵器	台付	—	(2.9)	—	—	脚径 3.0。外面の一部に目跡付着。
41	41	北区地域１	須恵器	台付	—	(2.4)	—	—	脚径 3.8。
42		南区地域１	須恵器	小坏	(8.7)	(3.9)	—	—	
43	43	南区地域１	須恵器	蓋	(6.2)	1.8	—	—	天井部径 4.0。
44	44	北区地域１	須恵器	蓋	7.3	1.8	—	—	天井部径 4.9。天井部に輪ボロ痕あり。
45	45	北区地域１	灰釉陶器	蓋	(22.0)	(3.0)	—	○	天井部径 (8.3)。内面全体に目跡とボロケ付着。
46		南区地域１	須恵器	蓋	(12.7)	(2.9)	—	—	
47		南区地域１	須恵器	蓋	(13.7)	(3.1)	—	—	外面に目跡付着。
48		南区地域１	須恵器	鉢	—	(5.9)	—	—	
49	49	北区地域１	灰釉陶器	鉢	(14.1)	(12.0)	—	○	内面のみ施釉しているが、発色不良。

表8　6号窯出土遺物観察表

第5章　総括

5号古窯跡について

全長は8.9mと近い時期の窯としてはやや小型であるが、煙道にたちあがりをもつことや、焼成室の斜面の角度等、矢戸上野2号窯に類似している。分炎柱は床が平坦な部分に造り、その後方の間仕切り障壁が燃焼室と焼成室の境となる。この障壁は手前で焼かれた小碗に自然釉がかからないように設置されたと考えられるが、壁自体に自然釉がかかっておらず最後の焼成の製品が白く焼け、失敗に終わっていることからも、どのくらい効果的であったかは不明である。また、焼台や製品に自然釉が付着しているものがあることから、最終操業前にはこの壁は無く、最終操業時に設置されたと考えられる。

可児地域では時期の近い窯として、谷迫間2号窯、下切兎田古窯跡、矢戸上野2号窯、ほうの木古窯跡があり、窯が未調査のほうの木古窯跡をのぞいて、間仕切り障壁をもつ窯跡は見られない。東濃地域でも灰釉陶器を焼成した窯として、正家1号窯、明和39号窯、白土原1・11古窯跡などで類似する間仕切り障壁のような壁が見られるが、時期差がありそこからの技術伝播は考えにくい。また、第四型式の瀬戸市穴田南5号窯は分炎柱の左側のみに幅16cmの棒状にした粘質土を2段に貼りあわせて分炎柱基部の焼成室よりの位置からほぼ真横に側壁に渡したものが見られるが、これも時期と距離が離れており、そこからの技術伝播も想定しづらい。今後、未調査の窯から間仕切り障壁が検出される可能性もあるが、この時期以降続かないことを考えると効率的でなかったため、他の窯に採用されなかった可能性が想定される。

窯名	主軸長				窯体幅（焼成室最大）	傾斜角
	全長	燃焼室	焼成室	煙道部		
大森笹洞5号窯	**8.9**	**2.7**	**5.2**	**1.0**	**2.3**	**30～45**
矢戸上野3号窯	9.45	2.6	5.4	1.45	3.05	35～44
矢戸上野2号窯	9.2	2.6	5.55	1.05	2.8	36～44
下切香ヶ洞古窯	9.85	3.6	5.4	0.85	3.0	36～45
下切兎田古窯	9.75	3.15	4.9	1.7	2.45	39～46
谷迫間2号窯	9.95	1.8	5.9	2.25	2.4	40～44
大藪迫間洞4号窯	(7.24)	2.7	—	—	2.6	(31～38)

表9　同時期近くの窯の規模等

焼台と焼成回数について

窯内の痕跡から推定される碗用の焼台の数は238個であり、物原から出土した溶着した碗から最大で6個を重ね焼きしたと考えられ、一度に約1428個の碗を焼くことができると想定される。小碗は窯の左側のみで焼成したと推定した場合に焼台は約60個であり、最大で8個溶着したものが見られ、一度に約480個を焼くことができると想定される。

窯内及び物原からは小碗用の焼台は出土しておらず、出土した碗用の焼台の重さは484,012gであり、窯内及び物原出土した完形の焼台91個の重さの平均は約1870 gであることから、出土した焼台の重さは約259個分の重さとなり、二度使われた焼台もあることを踏まえると焼成回数は2回程度と想定することができる。

なお、窯内の堆積土や床面からは生焼けの白色を呈する山茶碗が出土しており、最終焼成は不良に終わっていることが分かる。

5号古窯跡から出土した遺物については特徴を箇条書きでまとめる。

・出土した全製品のうち個体数の7割程度が碗であり、小碗が3割程度となる。そのほかには少数ではあるが片口碗、大碗、台付碗、高坏、壺、長頸瓶、仏器などを焼成している。
・形態から時期は矢戸上野2～谷迫間2号窯式期におさまる。
・碗、小碗ともに同時期のものと比べるとやや小振りである。
・小碗には指ナデが見られないが、碗の内面には指ナデが少し見られる。
・矢戸上野2号窯、谷迫間2号窯等の同時期の窯では高台にモミガラ痕が認められ砂の使用は言われていないが、5号窯では重ね焼きの際に砂の使用も確認される。
・内面にロクロ目が見られる碗が1点のみであるが見られ、粘土円柱に粘土紐を輪積みして焼成していたことが想定される。

6号古窯跡について

窯体は未調査であるため構造等は不明であるが、灰釉陶器と須恵器を併焼している窯である。

灰釉陶器は出土した全製品のうち個体数の約44%が椀類であり、皿が約15%を占める。また、須恵器の焼成割合は出土した全製品のうち約6%である。

灰釉陶器は椀や皿類は少なく、瓶類が比較的多く生産され、瓶類の高台にモミガラ痕が見られるものもわずかではあるが、見られる。実見する限り椀や皿は刷毛塗りを行っているものと浸け掛けのものが見られる。瓶類は刷毛塗りと想定されるが自然釉がかかり不明なものも多い。形態的には光ヶ丘1号窯式が主体であるが、浸け掛けが見られることや深椀や折縁皿が見られないことから時期は光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式と考えられる。

物原からは粘土塊の焼台が出土していない。自然釉が何度もかかったと思われる瓶類の頸部から口縁部にかけての破片や鉢等の体部の破片に碗類の高台の痕跡が見られることから焼台として使った可能性も考えられる。椀や皿類は重ね焼きの痕を残すものが見られることから、直接重ね焼きをして生産されている。

<参考文献>

可児町教育委員会　1978　『谷迫間２号古窯跡発掘調査報告書』
可児市教育委員会　1985　『大森奥山古窯跡群発掘調査報告書』
可児市教育委員会　1985　『下切兎田古窯』
可児市教育委員会　1994　『矢戸上野２号古窯跡』
可児市教育委員会　1994　『下切香ヶ洞古窯跡』
可児市教育委員会　2001　『大森新田古墳群発掘調査報告書』
可児市教育委員会　2016　『大森奥山11号古窯跡発掘調査報告書』
斎藤孝正　1989　「灰釉陶器の研究Ⅱ―猿投窯第Ⅴ期椀・皿類の型式編年―」『名古屋大学文学部研究論集』104
瀬戸市教育委員会　1992　『穴田南古窯跡群Ⅳ －第４・５・７号窯跡発掘調査報告－』
多治見市教育委員会　1989　『白土原１・２・３号窯跡発掘調査報告書』
多治見市教育委員会　2016　『大針16号窯・北丘30号窯発掘調査報告書』

図版1　5号窯

窯体完掘状況（西より）

調査区調査後全景（北西より）

5号窯調査前(北西より)

窯体検出状況(西より)

窯体b-b'土層(東より)

窯体完掘状況(南西より)

窯体完掘状況(北西より)

窯体完掘状況(東より)

煙道部付近(南より)

焼成室中央付近(西より)

図版３　５号窯

焼成室分炎柱付近（西より）

分炎柱と間仕切り障壁（北より）

分炎柱と間仕切り障壁（西より）

間仕切り障壁左側（西より）

間仕切り障壁左側（南より）

間仕切り障壁右側（西より）

間仕切り障壁右側（北より）

燃焼室（西より）

窯体断ち割り状況(西より)

主軸断ち割り状況0-2m付近(南より)

主軸断ち割り状況2-4m付近(南より)

主軸断ち割り状況4-5m付近(南より)

主軸断ち割り状況5-6.7m付近(南より)

分炎柱断ち割り状況(南東より)

分炎柱断ち割り状況(北西より)

主軸断ち割り状況7-9m付近(北より)

図版5　5号窯

b-b'ライン北側断ち割り状況（東より）

b-b'ライン南側断ち割り状況（西より）

d-d'ライン北側断ち割り状況（西より）

d-d'ライン南側断ち割り状況（東より）

窯体北側作業場完掘状況（北より）

A'-B'土層（南より）

B'-C'土層（北東より）

C'-A''土層（北東より）

C'-A''土層(北西より)

B'-B''土層(西より)

C-C'土層(北西より)

C'-C''土層(北西より)

6号窯

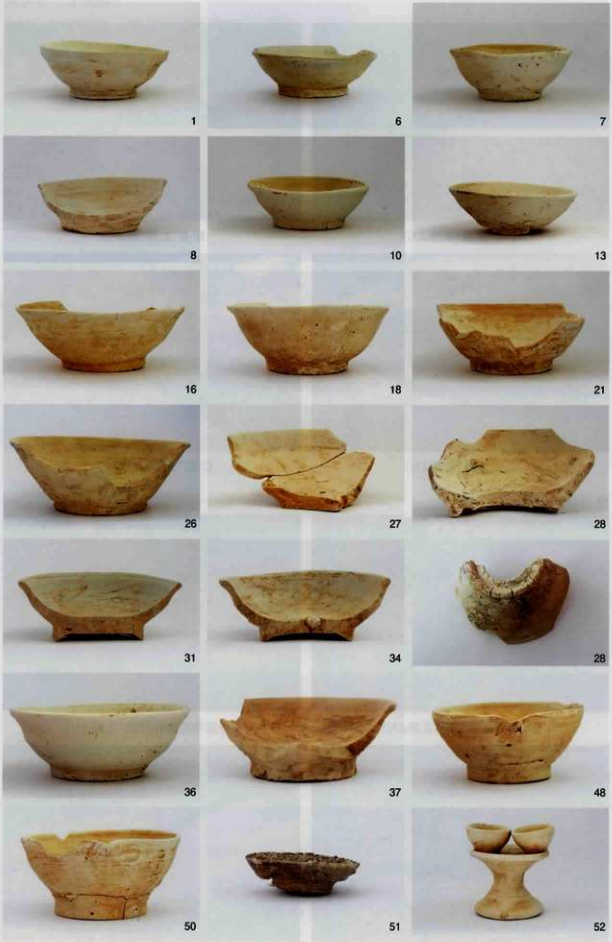
6号窯物原調査前(北西より)

6号窯物原完掘状況(北西より)

a-a'土層(南西より)

b-b'土層(北より)

図版7　5号窯



54

59

74

77

81

85

92

96

96

100

113

117

121

123

117

137

138

141

152

155

157

図版9　5号窯

159

161

162

163

164

171

172

171

172

碗溶着資料

小碗溶着資料

内面の回転糸切痕

2

6

6

7

17

19

22

29

30

31

32

34

35

36

37

40

41

43

44

45

49

報告書抄録

ふりがな	おおもりささぼら5・6ごうこようせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大森笹洞5・6号古窯跡発掘調査報告書
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	53
編集者名	長江真和
編集機関	可児市教育委員会
所在地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
発行年月日	西暦2018年12月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号			面積	
おおもりささぼら 大森笹洞5号 古窯跡	ぎふけんかにしおおもり 岐阜県可児市大森 1690番1	21214	4846	35° 22′ 44″	137° 5′ 6″	20170627～ 20170928	中央新幹線建設に伴う非常口及び換気施設、管理用道路の設置
おおもりささぼら 大森笹洞6号 古窯跡	ぎふけんかにしおおもり 岐阜県可児市大森 1690番1	21214	4847	35° 22′ 41″	137° 5′ 6″		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大森笹洞5・6号古窯跡	生産遺跡	古代・中世	窯体、 作業場、 物原	山茶碗、 灰釉陶器	大森笹洞5号窯跡は間仕切り障壁をもつ矢戸上野2～谷迫間2号窯式の窯跡である。 大森笹洞6号窯跡は、光ヶ丘1号～大原2号窯式が主体の窯跡であり、物原のみの調査を行った。

大森笹洞5・6号古窯跡発掘調査報告書

平成30年12月21日　印刷
平成30年12月21日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
Tel 0574-62-1111　Fax 0574-63-6751
印　　刷　丸理印刷株式会社